

# 愛媛県の地震

2020年（令和2年）11月

## 目次

1. 愛媛県周辺の震央分布図	1
2. 地震概況（11月）	1
3. 愛媛県で震度1以上を観測した地震（11月）	2
4. 愛媛県で震度1以上を観測した地震 の震度分布図（11月）	2
5. 地震一口メモ 「南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会」	3

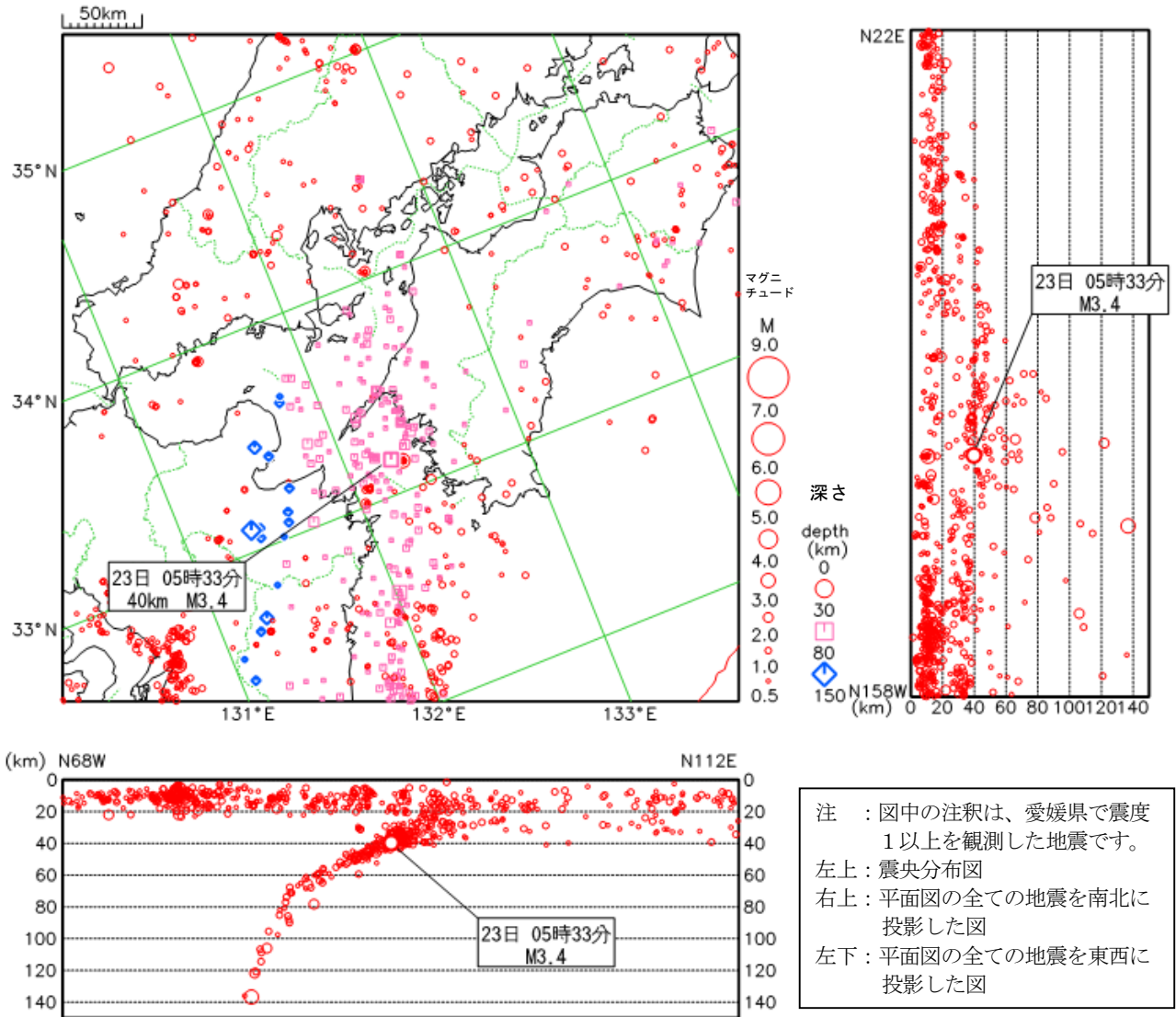
本資料に記載した震源要素（緯度、経度、深さ、マグニチュード）は、暫定値です。これらは、後日、再調査のうえ修正することがあります。

本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。

また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

松山地方気象台

# 1. 愛媛県周辺の震央分布図 [2020年11月1日~11月30日]



震央分布図は地震が発生した場所を地図上でプロットしたものです。地震は地下で発生しますのでシンボルマークの形を深さに応じて変えています。○より◇の方が深い場所で発生した地震です。  
 また、シンボルマークの大きさで地震の規模（マグニチュード）を表現しています。

## 2. 地震概況（11月）

今期間に、上図の震央分布図内の領域で決定した地震のうち M2.0 以上の地震の回数は 37 回（先月は 38 回）、愛媛県内で震度 1 以上を観測した地震は 1 回（先月は 1 回）でした。

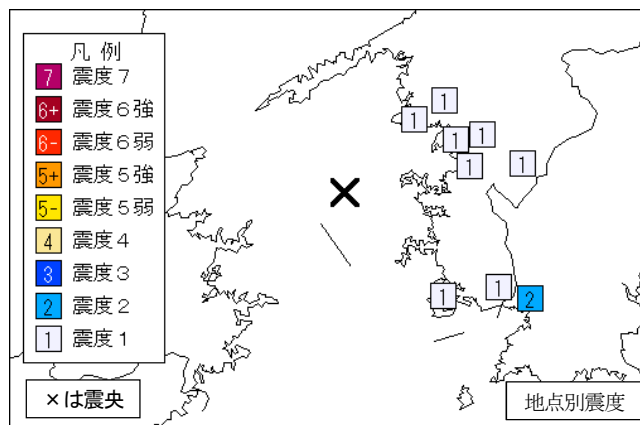
23 日 05 時 33 分 豊後水道の地震（深さ 40km、M3.4）により、高知県宿毛市で震度 2 を観測したほか、愛媛県で震度 1 を観測しました。

### 3. 愛媛県で震度1以上を観測した地震（11月）

震源時（日時分）	震央地名	緯度	経度	深さ	マグニチュード	最大震度
愛媛県内各地の震度						
2020年11月23日05時33分	豊後水道	33° 09.8' N	132° 15.3' E	40km	M3.4	最大震度2
----- 地点震度 -----						
愛媛県	震度 1：宇和島市丸穂＊, 宇和島市吉田町＊, 宇和島市三間町＊, 松野町松丸＊ 西予市宇和町＊, 西予市明浜町＊, 愛南町船越＊, 愛南町一本松＊					

注：＊印は地方公共団体または国立研究開発法人防災科学技術研究所の震度観測点です。

### 4. 愛媛県で震度1以上を観測した地震の震度分布図（11月）



## 5. 地震一口メモ

### 南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会

気象庁では、南海トラフ全域を対象として地震発生の可能性を評価した結果を「南海トラフ地震に関連する情報」として発表するにあたり、有識者から助言をいただくために「南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会」を開催しています。

評価検討会には、観測データに異常が現れた場合に南海トラフ地震との関連性を緊急に評価するための臨時の会合と、平常時から観測データの状況を把握するために原則毎月1回開催している定例の会合があります。

評価検討会の委員は、現在6名の有識者で構成されています。また、南海トラフ及びその周辺地域における気象庁以外の機関の観測データについて説明を受けるため、関係機関（国土地理院、海上保安庁、防災科学技術研究所、海洋研究開発機構、産業技術総合研究所）にも評価検討会に参画いただいています。

12月7日に定例の評価検討会が開催され、調査結果が「南海トラフ地震関連解説情報」として同日報道発表されました。今回の評価検討会では、四国西部で11月20日から27日にかけて観測された深部低周波地震（微動）や、これとほぼ同期して周辺に設置されている複数のひずみ計で観測されたわずかな地殻変動等の活動が評価検討されました。これらの深部低周波地震（微動）と地殻変動は想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定され、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。その他検討された観測結果を含め総合的に判断すると、「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時<sup>(注)</sup>と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」と評価されました。



評価検討会の様子（2019年1月10日撮影）

（注）南海トラフ沿いの大規模地震（M8～M9クラス）は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率が70～80%であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から既に70年以上が経過していることから切迫性の高い状態です。

【参考】南海トラフ地震関連解説情報について（令和2年12月7日気象庁報道発表）

<https://www.jma.go.jp/jma/press/2012/07a/nt20201207.html>

【参考】長期的ゆっくりすべり、短期的ゆっくりすべり、深部低周波地震（微動）

<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/nteq/nteqword.html>